

小特集 第12回国際エチオピア学会

第12回国際エチオピア学会報告

栗本 英世

第12回国際エチオピア学会¹⁾が、1994年9月5日から10日の6日間にわたって、アメリカ・ミシガン州イーストラランシングにおいて開催された。組織委員長は、エチオピア近代史の著名な研究者である、ミシガン州立大学(MSU)教授のハロルド・マーカス。参加者316名、発表論文数266、会期と同時に発行された論文集に掲載された論文数149という、学会の歴史のなかでも最大規模の大会であった。

会場は、MSUキャンパスのすぐ近くにあるホリデイイン・ホテルで、参加者の多数もここに宿泊していた。イーストラランシングは、学生数4万3千を擁するMSUの大学町で、犯罪や治安の問題とは無縁の、落ち着いたたたずまいの小都市である。ホテルの近辺には学生相手の、気のはらないカフェテリアやレストランがたくさんあり、学会参加者にとっては便利であった。残暑の厳しい日本と比べるとかなり涼しく天気にも恵まれ、快適な気候であった。

日本からの参加者は、鈴木秀夫、柘植洋一、福井勝義、稗田 乃、松田 凡、重田眞義、宮脇幸生、栗本英世の8名であった。これまでで最大の参加数である。

多数のエチオピア人の参加

今回の学会で目をひいたのは、エチオピア人の参加者が多いことである。正確な数はわからないが、100名以上だと思われる。そのうち、組織委員会によって、エチオピアから招待されたのは47名であった。かれらの航空運賃、ホテル代、日当に充当する資金を確保するのは組織委員会の責任である。26名はMSU、10名はUSAID (US Agency for International Development)、1名はエチオピア航空が負担した。

この47名は、アデイスアババ大学の教官から構成される選考委員会によって選ばれた。最初の段階では、論文のタイトルを添えて、発表を希望した者は100名近かったらしい。最終的に論文を提出し、選考をパスしたのが47名というわけである。エチオピア研究所のバフル・ザウデ所長、元所長のタダセ・タムラット教授、言語学科長のバエ・イマム博士など、主要な研究者はほとんど含まれている。また、クロード・サムナー教授(哲学)、リチャード・パンクハースト教授(歴史学)とリタ・パンクハースト夫妻、アルラ・パンクハースト博士(人類学)など、アデイスアババ大学に勤務し、長年エチオピア研究に携わってきた外国人教官も参加していた。

1992年、エチオピアのEPRDF (Ethiopian Peoples' Revolutionary Democratic Front)政府は、47名のアデイスアババ大学教官を罷免した。この、新政府による大学自治への干渉は、おおきな議論を呼んだが、そのうち3名が大会に出席し、発表した。エチオピア研究所の前所長タダセ・ベエネ、経済学教授だったファカドゥ・デギフェ、社会学講師で数少ない女性教官のひとりだったツァハイ・ブラハン=セラシェの3名である。この3名は現在、どの研究機関にも所属していないが、組織委員会の特別のはからいによって招待されたい。かれらの存在は、後に述べるように、この学会のある性格を表していたといえる。

現在、国外に居住し、エチオピア研究に従事するエチオピア人研究者・大学院生の数は多い。今回も、アメリカのみならず、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、オーストラリア、イスラエルなどから、30名以上が参加・発表した。う

1) 名称は、International Conference of Ethiopian Studies。本会議は、メンバーシップの固定した学会組織が主催するものではないので、「国際エチオピア研究会議」と訳すのが適当であろうが、日本での慣例にしたがって「国際エチオピア学会」としておく。

ち、ホスト機関であるMSUに所属する者が7名を占めている。現在はドイツに居住しているパイル・タフラ博士、アメリカにすむゲタチヨ・ハイレ博士という、歴史学の先達2人も発表者に含まれていた。ふたりとも、革命のために亡命を余儀なくされた人たちである。パイルは視力を失い、ゲタチヨは車椅子の生活と、ハンディキャップをかかえているにもかかわらず、積極的に討論に加わり、深い学識と、衰えない知的関心を披露して、聴衆に感銘を与えていた。

また、50万人以上といわれるアメリカのエチオピア人コミュニティ（市民権を獲得した人も多い）からの参加者もいた。例えば、私が話を交わしたなかには、アメリカ国務省に勤務し、ODAの視察で来日したこともある、経済の専門家がいた。また、かつて私の調査地であるガンベラの病院に勤務していた看護婦さんで、夫であるアメリカ人の医師とともに学会に参加した女性もいた。こうした人々も熱心に聴講し、討論に参加していたのである。

つまり、イーストランシングは、多数のエチオピア人にとって再会と情報交換の場になったのである。これも学会の成果の一つといってよいだろう。

エチオピア研究の最新動向

学会に先だって発行された論文集は、『エチオピア研究の新潮流』と題されている。上下2巻に、149の論文が収録され、全部で2,400頁近い分厚いものである²⁾。実際におこなわれた発表は、これよりずっと多い。ところで、学会の開催にあわせて論文集が刊行されたのは、今回がはじめてである。これまでは終了後2、3年たってから刊行されるのがふつうであった。5日間の会期中、テーマ別にそれぞれ3～4の発表があった分科会が全部で53、パネラーが問題提起をし、自由に討論をおこなうラウンドテーブル・セッションが4、総合セッションが2、催された。プログラムの詳細は、後出の「第12回国際エチオピア学会プログラム」を参照されたい。以上の多数の発表が、どれだけ「新潮流」であ

るかは別にしても、現時点での世界におけるエチオピア研究の、かなりの部分を代表していることは確かであろう。

53の分科会を概観してみよう。エチオピア研究の伝統的な核といえる、歴史学は17、言語学は7とやはり多い。全体のほぼ3分の1を占める歴史には、近年の発掘成果を中心にしたアクスム研究から、史料の文献学的検討、美術史、近現代史など、多様なセッションが含まれる。言語学には、クシ系諸言語、オモ系諸言語の分科会がそれぞれひとつ含まれていた。それに対して、人類学の分科会は4と相対的にすくなかった。

今回の特徴のひとつは、今日的、現実的な課題がおおきな比重を占めていたことである。教育問題を論じた分科会は4、開発・環境・土地問題が9、政治体制が2、エスニシティが2、憲法問題が1と、全体のほぼ3分の1になる。いずれも、社会主義体制下の変化をふまえて、あたらしい政権のもとで、いかに実際的な対応をしていくべきかが、問題設定の根本にあったといえる。

ラウンドテーブルの内容は、エチオピアにおける調査研究の必要性和振興に関するものが2つ、高等教育の問題点が1つ、そして近現代史における政治文化の問題に関するものが1つであった。最後のセッションは、バフル・ザウデ、ハロルド・マーカス、ドナルド・グラミー（イリノイ大学）という3人の著名な歴史学者をパネラーにそろえ、満員の盛況であった。

ふたつの総合セッションは、学会のハイライトであった。「エチオピア再考」と題されたセッションの発表者はいずれも歴史学者で、バフル・ザウデの司会で、ドナルド・クラミー、ドナルド・レヴィン（シカゴ大学）、オロモ研究者のテセマ・ター（アディスアババ大学）が発表した。エチオピア研究の長老格だが、いまだに若々しいレヴィンは、1960年以降の民族間関係のダイナミズムを振り返り、将来を展望した。この発表は、賞賛と保守的で時代遅れだという批判の両方をもって迎えられたようであ

2) *New Trends in Ethiopian Studies: Papers of the 12th International Conference of Ethiopian Studies, Vol.1: Humanities and Human Resources, Vol.2: Social Sciences*, Harold G. Marcus (ed.), Lawrenceville: The Red Sea Press, 1994. ペーパーバックとハードカバーの両方が出版されている。

る。もうひとつのセッション「エチオピア暫定政権はうまくやっているか?」については次節でとりあげる。

政治情勢の影

先回の第11回学会は、アデイスアババでメンギスツ政権のまさに最末期に開催された。1991年4月初旬のことである。ERPFDの部隊は首都から約100kmの地点にまでせまっていた。学会には、メンギスツ大統領が来賓として出席したが、翌月彼は国外に脱出し、首都はERPFDによって制圧されたのである。今回の学会は、軍事独裁の社会主義政権が崩壊し、ERPFD指導下の暫定政権が成立し、そして1993年にエリトリアが分離独立を達成して以来最初のものであった。こうした政治情勢の変化が、個別の発表内容ばかりでなく、学会全体の基調におおきな影響を及ぼしていたように思う。

エチオピアでは、年内にも新憲法が制定され、それに基づき総選挙がおこなわれ、新大統領が民主的に選出される予定である。それによって、ERPFD暫定政権は、みずからの権力基盤を磐石のものとすると同時に、すでに推進してきた資本主義的な解放経済政策、構造調整プログラム、民族単位の自治州の設定といった新政策、および前政権から受け継いだ土地の国有化政策の基本的存続に正統性を付与することを目指している。

今日的課題を論じた分科会のおおくは、こうした政治情勢を直接に反映していた。エスニシティの問題、民主主義と地方分権のあり方の問題、土地制度の問題など、すべてホットな政治的課題そのものであるといえる。

概していえば、学会に参加したエチオピア人研究者たちの多数、つまりエチオピアのインテリを代表する人たちは、暫定政権に対して、きわめて批判的である。彼らは、暫定政権の合意によって達成されたエリトリアの分離独立も、おおきな誤りと認識している。また、民族単位の自治州に大幅な権限を与える体制も、エチオピアのさらなる分解につながるとして警告している。この対立の構造は、ティグレ人を主体としたERPFDに対する、アムハラ人を中心

とするインテリの、保守的なナショナリズムの表現と解釈することも可能だろう。

たとえば、アデイスアババ大学を追放されたタダセ・ベエネは、言語学の分科会で「エチオピアの文字システム」と題した発表をおこなった。そこで彼は、アムハラ文字は従来いわれたきたように音節文字ではなく、アルファベットであり、したがって文字として進化した、すぐれたものであると論じた。これは、はっきりとは言明しなかったものの、オロモ自治州で採用されている、アムハラ語・アムハラ文字を廃し、ローマ字で表記されたオロモ語を公用語とする政策に対する、あきらかな挑戦である。

こうした傾向が、顕著に表現されたのが、総合セッション「エチオピア暫定政権はうまくやっているか?」であった。最初の発表者は、タダセ・ベエネと同じく、大学から追放された経済学者のファカドゥ・デギフェだった。彼の口演は、研究発表というより、ERPFDに対する個人的な心情の吐露であったが、会場からはおおきな拍手を浴びた。革命時は学生運動の闘士であった経済学者のエシエトゥ・チヨレは、統計資料に基づき、暫定政府の経済政策の失敗を指摘した。また、かつてアデイスアババ大学で教鞭をとったことのある、政治学者のセオドア・ヴェステル（オクラホマ州立大学）は、暫定政権の非民主的な側面を指摘した。

エチオピアからの参加者の意見が、エチオピア人のマジョリティを代表しているかどうかは、また別の問題である。しかし、今回の学会で私があらためて感じたのは、政治と学問の不可分性であった。歴史学、言語学、人類学といった分野も、例外ではないのである。今後の政情の変化にともない、エチオピア研究もどう変貌していくのか、興味深い問題である。

大会運営の「アメリカ的」あり方

今回の学会は、良きにつけ、悪きにつけ、よく組織・管理された日本の学会やシンポジウムに慣れた感覚からすると、面食らうことがおこった。ひとこと言えば、放任主義というか「自分でやれ」('Do it yourself')原理にのっとっていたといえる。た

たとえば、以下のような点である。学会前に送付されたサーキュラーには、会場のイストラランシングへの行き方に関する情報が含まれていなかった。プログラムが手渡されたのは前日である。マイクの設置されていない会場があった。会場には、スライド操作や電気の消灯・点灯の係がなかった。エクスカッションやツアーの案内・便宜がなかった。開会式後のパーティーの食事が質素であった等々。

これらはある意味でフィロソフィーの問題だから、是非をあげつらうつもりは、もちろんない。しかし、次に述べる問題はもうすこし重要なものと思われる。

学会のオープニングとして、9月5日の夜7時から、組織委員長ハロルド・マーカスと、MSU学長によるスピーチがあった。いずれも、儀礼的・社交辞令的なあいさつがいつさいなかったのも印象的だったが、驚かされたのはピーター・マクファーン学長の演説である。マーカスの紹介によると、学長は、MSUを卒業後、平和部隊に参加し、さらにUSAIDに職を得た。1984～85年のエチオピア大飢饉のときには、救援プロジェクトの責任者として陣頭指揮をとり、現地も訪問した。レーガン大統領の時代には、政権の中枢に近い位置にあり、その後乞われてMSU学長に就任した。いわばアメリカのエスタブリッシュメントのひとりである。

学長は、大飢饉救援の経験について、40分以上にわたって話した。共産主義国家であったエチオピアを救済する責務は、アメリカにはなかったが、人道主義に基づき介入したこと。国民を餓死から救う意志のない、メンギスツ政権と交渉するのはいかに困難であったか。この困難を克服して成し遂げられたアメリカの援助のおかげで、100万人以上のエチオピア人が救われたことなどが、話の骨子である。

学長は、聴衆から賞賛と感謝の拍手を期待していたのだろうか。スピーチのあと、質疑応答の時間が設けられた。これにも、私は驚かされた。日本では、来賓の祝辞について討論するなど、考えられないことである。学長は、当然のことながら、エチオピア人ばかりでなく、スウェーデン人、アメリカ人の聴衆からも、手厳しい批判とコメントを浴びせら

れた。スリリングな興味深い時間であったにしても、参加者のほとんどにとってはきわめて不評なセレモニーであった。この後、「質素」な食事のパーティーが続いたのである。

私は、アメリカでの学会に参加したのは初めてなので、以上述べたことが「アメリカ的」といえるのかどうかはわからない。むしろ、歴史学の分科会が多かったことも含めて、組織委員長であるマーカスの意向とイデオロギーが基調をなした学会であったといったほうがよいのかもしれない。

『エチオピア 創造性の伝統』展

学会の関連事業として、MSU付属博物館において『エチオピア 創造性の伝統』と題された展覧会が開催中である。期間は、7月24日から12月16日まで。これは、土器作り、カゴ作り、織物師、銀細工師、画家など、エチオピアの多様な民族と文化的伝統を代表する、11名の職人・芸術家の作品を集めた展示である。観光客相手のみやげ物や、日用品から、芸術作品に至るまでの幅広い作品を収集していること、作者は匿名ではなく、写真入りの実名で登場し、彼ら（彼女ら）の語りが展示の重要な構成要素になっていることなどが特徴である。組織者は、同博物館のキュレーターであるレイモンド・シルバーマンで、エチオピア人と欧米人の研究者からなるチームがおこなった調査が、展示の基礎になっている。この調査と展示の成果は、シルバーマンの編により、*Ethiopian Traditions of Creativity*のタイトルで、MSUから来年刊行される予定である。

私はよくできた展覧会という印象を抱いたが、ふたつの不満を耳にした。調査に参加した人類学者のひとり、彼が採録した職人・芸術家の語りのオリジナルなテキストが、アメリカの観覧者にアピールするように、大幅に改変・編集され、極端な場合には「創作」されていることを批判していた。もうひとつは、展示内容の「真正性」（オーセンティシティ）に対する不満である。エチオピア人のなかには、みやげ物や現代的な芸術作品は、真のエチオピア文化を代表するものではないと受けとった人たちがいたようだ。展示の受けとめ方は、その人の立場

や知識、文化的背景によって、さまざまである。文化に関する展示の難しさを、考えさせられるエピソードであるといえよう。

1997年、第13回学会に向けて

さて、学会最終日の土曜日、最後の総合セッションにおいて国際組織委員会から、次回の学会が3年後に日本で開催される旨の正式の表明があった。日本での学会は、運営や内容の面で、イーストランシングのものとは、かなり異なるものになるだろう。

エチオピア研究は、ある意味で、アフリカとも中東とも異なるエチオピアの「ユニークさ」とらわれている傾向がある。これは、研究にとって有利であると同時に不利な特性である。東アフリカ、スーダン、中東地域の研究者が多数参加するであろう次回の学会は、エチオピア研究を、より広い

リージョナルな文脈で再構築する、格好の機会になるのではないだろうか。また、自然人類学、霊長類学や生態学、農学など、自然科学の分野の発表やセッションも増えることと思われる。このことも、人文学と社会科学に中心のあったエチオピア研究に、あらたな刺激を与えるものと期待される。また、近現代における、日本とエチオピアの関係史も、分科会のテーマとしてこれまでとりあげられたことのない、興味深い課題である。第12回に参加していた、ドナルド・レヴィンは、日本での学会では「エチオピアと日本の比較文明史」について発表したいと述べていた。これも、日本での開催にふさわしいトピックだといえる。いずれにせよ、主催者側は、学会のデザインとポリシーについて、真剣に議論し、考える必要があるそうである。

(くりもと えいせい 国立民族学博物館)

国際エチオピア学会小史

栗本 英世

第1回国際エチオピア学会が開催されたのは、1959年、ローマにおいてであった。以後35年間に今年9月にアメリカで開催されたものも含めて、12回の学会が世界各地で組織されてきた。そして、1997年の第13回は、日本で開催されることが、正式に決定している。本学会は、1963年に創設されたアディスアババ大学エチオピア研究所、および同研究所の発行する『エチオピア研究』(*Journal of Ethiopian Studies*)とともに、エチオピア研究の推進に中心的な役割を果たしてきた。アフリカ・中東を対象とする地域研究の学会のなかでも、歴史と国際性のある、大規模でユニークな組織であるといえる。本稿では、この国際学会の発

展と変遷の経緯を、簡単にふりかえってみたい。

まず、これまでの開催地と開催年度は以下のとおりである。

1. イタリア、ローマ 1959
2. イギリス、マンチェスター 1963
3. エチオピア、アディスアババ 1966
4. イタリア、ローマ 1972
- 5 a. フランス、ニース 1977
- 5 b. アメリカ、シカゴ 1977
6. イスラエル、テルアビブ 1980
7. スウェーデン、ルンド 1982
8. エチオピア、アディスアババ 1984
9. ソ連、モスクワ 1986

1) 本稿の執筆にさいして、アディスアババ大学エチオピア研究所刊行の*Journal of Ethiopian Studies*, vol.27, no.1, 1994に掲載された Bahru Zewde, Baye Yimam, Eshetu Cole and Alula Pankhurst, 'From Lund to Addis Ababa: A Decade of Ethiopian Studies' および、Sushma Gupta, 'The International Conference of Ethiopian Studies, 1959-1991: Bibliography and Index'を参照した。また、第7回までの回顧と展望を論じたものとして、Rita Pankhurst, 'International Conferences of Ethiopian Studies: A Look at the Past'. *Proceedings of the Seventh International Conference of Ethiopian Studies*, Sven Rubenson (ed.), 1982.がある。

- | | |
|---------------------|------|
| 10. フランス、パリ | 1988 |
| 11. エチオピア、アデイスアババ | 1991 |
| 12. アメリカ、イーストラランシング | 1994 |

第1回の実現に尽力した中心人物は、エチオピア言語学の泰斗、エリンコ・チュルリ（1898-1988）だと言われている。当時のエチオピア研究は、むしろ「アビシニア研究」と呼ぶべきもので、現在のティグレ・アムハラ民族から構成される「アビシニア人」の歴史、言語、宗教などの人文学的研究を柱としていた。それは、ユダヤやアラブの研究を含む、広義のセム研究の一翼を担うものであり、ヨーロッパでは数百年におよぶ伝統のある分野である。この分野は、現在に至るまで、エチオピア研究の「本流」あるいは「正統」であり続けている。

これまでの学会の発表論文は、すべて論文集 (proceedings) のかたちで公開されている。第1回の掲載論文数は、35であった。使用言語のうちわけをみると、イタリア語13、フランス語12、英語6、ドイツ語4となっている。この言語状況は、ローマ開催のため、イタリア人参加者がおおかったことを差し引いても、当時のエチオピア研究の実情をよく反映しているといえよう。エチオピア人の寄稿者（エチオピア正教の聖職者）は、わずか1名であった。彼の論文はイタリア語で書かれている。ちなみに、第1回の寄稿者のなかで、35年後に開催された第12回にも参加し、論文を発表した人が2名いる。イタリアのランフランコ・リッチと、アメリカのドナルド・レヴィンである。歴史学者の両先生は、現役の研究者として健在である。

1972年に、ふたたびローマで開催された第4回までは、セム研究を中心とした学会の基調には、基本的な変化はなかったといってよい。論文集に収録された論文数も、増減はあるものの、50前後でほぼ一定していた。ただ、歴史学と言語学の分野で、エチオピア人研究者の数が徐々に増加していったこと、少数ではあるが、I・ルイス、H・ルイス、P・バクスターなどの人類学者も参加しはじ

めたことが、後の変化につながる要因として指摘できる。たとえば、第4回の論文集では、全59の論文中エチオピア人の執筆したものが10を数える。現在のアデイスアババ大学で要職を占めている、タダセ・タムラット教授とメリッド・ウォルデ・アレグイ博士の論文がはじめて掲載されたのもこの大会である。

1974年の帝政廃止、1975年の社会主義革命に続くエチオピアの動乱は、当然のことながらエチオピア研究にもおおきな影響を与えた。ハイレ＝セラシエ1世大学から、アデイスアババ大学へと改称された大学は、急進的な政治運動の本拠となり、革命軍事政府による苛酷な弾圧の結果、多数の学生・教官が逮捕・拘禁され、あるいは国外に亡命した。また、西側諸国、とくにアメリカの研究者が、調査研究の目的でエチオピアに入国することは、きわめて困難になった。

国際エチオピア学会も、混迷の時期を迎える。第5回学会は、フランスとアメリカで分裂開催になった。しかし、現実には進行しているエチオピアの変動に対応して、政治学、経済学、開発問題などに関する発表が増加したのが、第5回の特徴である。イスラエルのテルアビブで開催された第6回は、エチオピアからの参加者がゼロで、論文集の収録論文数も31と、過去の最低を記録した。諸論文の内容は、ほとんどが伝統的なセム研究の範疇に入るもので、その点では保守的な学会であった。

1982年にスウェーデンのルンドで開かれた第7回は、混迷を脱し、その後の発展の礎となった学会として高く評価されている。社会科学と時事的な問題に関する発表が増加し、またエチオピア人研究者の発表も、全体の4割近くを占めるに至った。全発表数は87で、論文集に収録されたものは71である。多数のエチオピア人研究者が参加できたのは、組織委員会が旅費と滞在費を負担したからである。このあたらしい試みは、現在に至るまで踏襲されている。革命直後の動乱時期を経て、1980年代に入ると、エチオピアの政情、およびアデイスアババ大学の状況が、相対的に安定した

(もちろん、内戦と飢餓は激化していたが) ことも、国際学会の復興の背後要因にあげられるだろう。

第8回以降は、参加者の数が飛躍的に増加し、コンスタントに200名を越えるようになり、論文集の収録数も100をはるかに上まわっている。今年開催された第12回の論文集には、149の論文が収録されている。その結果、参加者全員が一同に会して発表する、旧来の方式は不可能になり、いくつかの分科会が平行してもたれるようになった。たとえば歴史学は、「考古学と先史学」、「西暦1800年までの歴史」、「西暦1800年以降の歴史」の三つに分裂している。人類学、開発、教育、法律と現代の政治学などの分野も独立した分科会を構成するようになってきている。たとえば、117の論文が収録されている第11回の論文集の分野別構成は以下のとおりである。人類学 23；考古学と先史学 7；開発 12；教育 7；西暦1800年以前の歴史 5；西暦1800年以降の歴史 16；法律と現代政治 8；言語学 16；文学 14。

また、現在のような3年ごとの開催、および9年に一度はエチオピアで開催する形式が決定されたのは第10回のパリにおいてである。

以上のように、国際エチオピア学会は、小数のセム研究者の集まりから、おおきな変貌をとげてきた。それは、研究対象の面では、セム系のアビシニア人から、クシ系、オモ系、さらにはナイル・サハラ語族も含むエチオピア人全体へと拡大する過程であり、研究分野に関しては、人文学から、社会科学、および現代の諸問題の研究へと拡大する過程でもあった。さらに、国家としてのエチオピアの領域内にとどまらず、北ケニア、スーダン、ソマリア、および中東の研究者の参加も増加している。

参加者の出身国を見ると、イタリア、フランス、ドイツというヨーロッパ大陸諸国を中心とした核に、1960年代にはアメリカとイギリスが加わり、70年代以降は、旧ソ連と、スウェーデン・ノルウェーが加わった。エチオピア人研究者の増加は、さきに述べたとおりである。革命後の知識人

の亡命、および近年増加している欧米への留学のため、国外の研究機関に籍を置くエチオピア人研究者の参加数も多いことも付け加えておく。

最後に、日本人研究者の参加についても述べておく必要があるだろう。日本人として最初に参加し、発表したのは福井勝義で、第8回のことである。福井は第9、11、12回でも発表している。複数の日本人研究者が発表するようになったのは、第11回からのことだ。しかし、公刊された論文集に収録されたものに限ると、第8回の福井、第11回の宮脇幸生、第12回の重田眞義、栗本英世、宮脇に限られる。つまり、これまでの論文集に所収された、900以上の全論文のうち、わずか5点にすぎない。国際的なエチオピア研究における日本の位置は、まだまだマージナルであるといえよう。これは、日本人による研究成果が、外国の研究者にも利用可能なかたちでは、あまり発表されていない、つまり欧文による出版がすくないことにも原因がある。

しかし一方で、エチオピアで調査する日本人の数は、この数年間着実に増加しており、日本のエチオピア研究に対する関心と期待がふくらんでいるのも事実である。その具体的な現われとして、1991年の第11回学会において、福井勝義が国際組織委員会のメンバーに選ばれ、第13回を日本で開催してほしいとの要請を受けた。そして、日本での開催は、第12回学会において正式に決定したのである。国際組織委員会は、国際エチオピア学会のいわば最高決定機関であり、現在は、11名から構成されている。国別にみると、エチオピア(2名)、フランス、イギリス、イタリア、ドイツ、スウェーデン、イスラエル、ロシア、アメリカ、および日本である。

1997年に日本で開催される第13回学会を、世界中のエチオピア研究者が関心と期待をもってみまもっている。それは、国際エチオピア学会の歴史にとっても、日本のナイル・エチオピア地域の研究にとっても、きわめて重要な学会になることは間違いないであろう。

(くりもと えいせい 国立民族学博物館)